

10月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

思いがけない水害が福島県を襲った。会津地区にも避難勧告が何度も出された。私の住んでいる門田地区も該当していた。避難しなければならないのかどうか迷ってしまった。多くの人たちが犠牲になったように、私もまた「私のところは大丈夫だろう」という根拠のない自信で家にいた。結果的に何事もなかったが、果たしてそれでよかったのだろうか。

過去にも、東日本震災時、大雪時に適切な状況判断を何度か強いられたことがあった。いざという時に自分を見失わないために、「災害と病気は忘れた頃にやってくる」「常に備えよ」は座右の銘の基本中の基本である。

1・テレビから

◆「居心地の悪い場所から成長は始まる」〈NHK・BS「奇跡のレッスン」ソフトボール〉毎日決まりきったことでの繰り返しは練習ではないと元米国五輪代表の金メダリストは熱く語る。難しく、慣れ親しまないところでの新しいチャレンジから成長は始まる。

◆「やりにくい相手はありがたい。自分の弱さ、未熟さと対峙させられる」〈NHK・「先人たちの底力・知恵泉・桂小五郎」〉好きな人同士でチーム、仲間を作ることが許容されるのは小学校までか。チーム、組織には必ず自分の思うように動かない苦手な人間が存在するものである。避けるのではなく、自分を成長させてくれる存在ととらえたい。

2・読書から

◆「何がつらいと言ったって、用がなくて生きているほど世の中につらいことはないね」〈島崎藤村『破壊』河出書房〉旧制小学校を退職して酒浸りになっている人の言葉。我が身に置き換えながら考えた。いつれこのような日がやってくるかもしれない。その時までには与えられた仕事に感謝しながら、誠意、熱意、創意、室意で事に当たろう。

◆「スポーツの三つの基準①スポーツは楽しい②健康に役立つ③健全な娯楽を提供する」〈ジェームズ・A・ミッチェナー『スポーツの危機』サイマル出版〉スポーツ文化が歴史の洗礼を受けながら継承されるにはもう一つの基準が必要か。人間性の育成。

3・新聞、雑誌のコラム等から

◆「リーダーとしてやるべきことは三つだと思います。“判断する”“指示を出す”“責任を取る”」〈朝日・声〉先の台風15号に対する森田千葉県知事に向けられた批判。そっくり、バスケットボールのコーチにも当てはめられる。

◆「Were all the year one constant sunshine, we should have no flowers」〈朝日・折々のことば・宮城県のコンビニエンスストアで〉「年中、快晴の日ばかりだと花は咲かない」という17世紀英国詩人の詩の一節。コンビニのトイレは「一歩前へ(男子トイレ)」「きれいに使ってありがとう」だけではない。

◆「“グローバル”(地球規模の視点で考え、地域の視点で捉える)」〈朝日・五輪をめぐる・嘉納治五郎〉NHKの大河ドラマで一躍有名になった講道館柔道の創始者の教えである。その教え、理念をもとにできたのが全国屈指の進学校、灘中学、灘高校である。バスケットボールコーチも世界を視野において、自分のチームに応じた指導を心がけたい。